

谷崎潤一郎「痴人の愛」を読む

——一九二〇年代・都市・文学(一)——

田 口 律 男

はじめに

「痴人の愛」には、一九二〇年代・都市の様相が丹念に書き込まれている。ために、評者の多くは、作品中に夥しく出現するモダンな都市風俗の意味について、一度は必ず言及するし、ハナオミズムという流行語まで生んだこの作品の衝撃性を、当時の都市化する社会現象の側から照射しようと試みたりもする。これは、同時代評以来の基本的なスタイルであったと言つてさしつかえないだろう。

しかし、そうした把握の仕方に、根本的な不満がないわけではない。というのは、一つには、この作品が内包する都市の問題を、風俗のレベルに限定し、この作品を風俗小説の範疇に封じ込める傾向があるからである。そうでない場合でも、作品の持つ都市の問題を、単なる意匠にすぎないものとみなし、作品の中心を流れるのは、あいもかわらず、谷崎の作家的主題——「刺青」以来一貫している「悪」 \vee と「美」 \vee との諧和、それへの拝跪、もしくはマゾヒズムという主題——であるとする作品理解があまりにも一般化しすぎているように見受けられる

のである。

もちろん、その風俗や作家的主題にこだわり、作品内に散りばめられた都市風俗の記号群の、テクストにおける象徴機能を探ることや、谷崎の作家的主題の変奏の手法を考察することは、作品世界をトータルに把握するための有効な一手段ではあるが、問題をそこに絞りこんでしまうと、この作品に内在する位置のエネルギー、言いかえれば、背景にある一九二〇年代・都市とこの作品との緊張した影響関係を見落すことになりかねないと思われるのである。作品は、もっとアクチュアルな都市の問題を含みこんで、豊かに揺れ動いているように見えるのである。

では、ここでいう「都市の問題」とは、どのような性質のものか。以下で試みる本稿の分析の立場は、作品に散りばめられた個々の都市風俗の意味を考える前に、まず、作品世界が根幹にもっている、都市／田舎（地縁・血縁共同体）の断層の構造をつきとめ、その深い断層の中に陥った、都市流入者としての河合譲治の振幅を浮かびあがらせるところから出発すると言つてよい。つまり、都市の対極にある田舎（地縁・血縁共同体）についての認識をも考慮に入れ、それが都市と

どのような関係性を保ち、どのような力関係の磁場を生みだしているかといった問題を、あくまでも作品に即して追跡しようと考えてるのである。

都市小説とは、必ずしも、都市風俗だけを描いた作品とは限らない。むしろ、本質的なのは、都市に生きる人間の身体や思想、精神構造に、どのような形で都市が侵入し、その変更を余儀なくさせるか、或いは、どのような精神の劇を演じさせるか、ということであり、それを開示してみた作品として、都市小説「痴人の愛」を位置づけてみたいと考えるのである。

以下、まず、都市／田舎の断層に陥って、そのはざまを彷徨している都市流入者・河合譲治の姿から追跡してみることしよう。

一 都市流入者としての河合譲治

都市流入者とは、文字通り、生地≡故郷における地縁・血縁共同体から切りはなされ、都市へと流れこんだ人間の謂に他ならない。そこには、様々な位相があるろうが、都市流入者の一般的な実態や、その性格については、本誌前号で、「痴人の愛」よりやや遅れるが、ほぼ同時代の作品といってよい横光利一の「機械」を論じた際に触れたので、ここでは繰り返さない。

ひとまず、ここでは、河合譲治という人物を都市流入者という観点から、ひととおり検索してみることにしよう。作品中から拾い出せる彼の来歴に関する情報をリストアップすると以下のようなになる。

一、出身。△栃木県の宇都宮在▽。実家は、△相当に大きく農業を

営▽む△先祖代々の百姓▽家。彼は、中学までそこで成長する。

二、家庭環境。父親が早くに亡くなり、△年老いた母親▽が、△忠実な叔父夫婦▽と万事を切り盛りし、家を守る。その△総領息子▽。△二人の妹▽がいる。父不在のため、母との関係は、△世間普通の親子以上▽のものがあり、△慈愛▽に富む母を△尊敬▽してもいる。

三、出京。蔵前にある△高等工業▽（現在の東京工業大学）に入学するために、上京。母は、△総領息子▽の上京に対し、一言も愚痴をこぼさず、ただ△立身出世を祈▽っている。卒業後は、△技師▽になり、芝口の下宿屋から大井町にある会社へ電車で行く△サラリーマン▽となる。△月給百五十円▽。田舎の家に対する後顧の憂いはなく、いちおう△全く自由な境涯▽にある。

四、都市生活の実態。表面は、△質素で、真面目で、あんまり曲がなさ過ぎるほど凡庸で、何の不満も不満もなく日々の仕事を勤めてゐる▽△模範的なサラリーマン▽としての日常を送っている。会社の同僚が、彼に与えたニックネームは、△君子▽（もちろん、揶揄をこめてのもの）。

△夕方から活動写真を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たま／＼奮発して帝劇へ出かける▽くらいの人並みな△娯楽▽はたしなむが、△元来が田舎育ちの無骨者なので、人づきあひが拙く、従つて異性との交際などは一つもな▽い状態で、都市生活者の孤独を嘗めてゐる。同時に、△あまりに平凡な、あまりに単調なその日暮らし▽に△飽き▽ており、その△殺風景な生活▽からの脱出を願望してもいる。ほぼ、以上の四点が、河合譲治の自ら語る簡単なプロフィールである。まず、どこにでもありそうな来歴、どこにでもいそうな都市生活

者といった印象が浮んでくる。しかし、注意しておいていいのは、都市／田舎の意外に深い断層が、彼の内部に顕在しているということである。特に、四の都市生活に関するデッサンからもうかがいしられるように、△田舎育ち▽からくる△人づきあひ▽の拙さ、コミュニケーションの欠如、そこから派生する都市生活の孤独を厭う心性は、根強く彼の内部に蟠っていると云ってよさそうである。

△田舎▽における地縁・血縁のしがらみは、彼においては、驚くほど稀薄であったといつてよいだろう。それには、父親（家長）の不在と母親の庇護とが力を貸している。そして、半ば無自覚に、無意志的に手に入れられた都市における△全く自由な境涯▽は、一方で、△娯楽▽による享楽的生活を実現したが、もう一方で、根深い孤立と根無し草の生活とを生ぜしめたと言っても過言ではないだろう。いまや、彼にあつては、無自覚ながらも、都市における人間関係の稀薄さといふ知れぬ焦燥と欠如感を内に抱き、自らの安息所を求めて夜の街をさまよい歩いているといった按配なのである。

むろん、こういったことは、作品において、大きなウエイトをしめる訳ではないし、河合譲治という人物を知るうえでもほんの些細な要因に過ぎない。更に分けいって、次に、彼の精神構造といったところまで眺めてみよう。

五、その結婚観。少し長くなるが、要約しても大して短くはならないので、該当箇所をそれぞれ引用してみよう。自分は常識的な人間だが、結婚に関しては、△ハイカラな意見▽を持っていると前おきして、次のように述べている。

A 「結婚」と云ふと世間の人は大そう事を堅苦しく、儀式張らせる

傾向がある。先づ第一に橋渡しと云ふものがあつて、それとなく双方の考をあたつて見る。次には「見合ひ」といふ事をする。さてその上で双方に不服がなければ改めて媒人を立て、結納を取り交し、五荷とか、七荷とか、十三荷とか、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから輿入れ、新婚旅行、里帰り、……と随分面倒な手続きを踏みますが、さう云ふことがどうも私は嫌ひでした。結婚するならもつと簡単な、自由な形式でしたいものだとか考へてゐました。

Bたとひ如何なる美人があつても、一度や二度の見合ひでもつて、お互の意気や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云ふくらゐな、ほんの一時の心持で一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るもんじやない。

C 實際今の日本の「家庭」は、やれ箠笞だとか、長火鉢だとか、座布団だとか云ふ物が、あるべき所に必ずなければいけないかつたり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れてゐたり、近所隣りや親類同士の付き合いがうるさかつたりするので、そのために余計な入費も懸るし、簡単に済ませることが煩雑になり、窮屈になるし、年の若いサラリー・マンには決して愉快なことでもなく、いゝこともありません。

このように、つごう三通りの見解を聞くことができるが、ここで際だつてくる河合譲治の特徴は、Aにおける伝統的、因襲的結婚制度に対する嫌厭の心性と、Bにおける醒めた理性的思考回路、そして、Cにおける経済観念の発達した現実的な判断力である。じっさい、Bや

Cにうかがえる柔軟な思考力は、従来の制度的な結婚形態が持つ不合理性——夫婦間の人格的な面でのコミュニケーションの不足、性役割に縛られた半封建的分業制、それらの延長上にくる地縁・血縁共同体の因循な人間関係のしきたり、等を冷静に見抜いていると言えるだろう。河合譲治には、このように、共同体が守り続けてきた制度としての結婚のネガティブな側面を見抜き、それを嫌悪する精神が内在していることがわかる。

だとすると、当然、次のことが問題になってくる。当時であつては△ハイカラ▽だったこうした河合譲治の炯眼が、どのようにして培かれたかという問題がひとつ、二つめは、その炯眼が、はたして本物であつたかという問題である。

一点めについては、小説中にそれを解く情報は与えられていない。だから、読者は、先にみた△田舎育ちの無骨者▽というイメージと、一見矛盾する△ハイカラ▽な思考法とが、河合譲治の内部に何の脈落もなく同居していることに、少なからず戸惑いを覚えつつ、それを、河合譲治の二面性としておさえなくてはならなくなる。

しかし、あえてそこに連絡をつけるならば、一つには、彼が「家」に関する神話をほとんど内面化しなかつたであろうことが要因として考えられる。つまり、△先祖代々▽の家ではありながら、彼の家庭環境は、先にも見たように、驚くほどその求心的な結束力を喪つていた（父——家長の不在による部分が大きい）。そのため、「家」にまつわる様々な規範や暗黙の戒律（そこには、因襲的な結婚制度や封建的夫婦関係のありようも含まれる）が、彼には根本的に身につかなかつたと考えられるのである。彼は、母の庇護のもと、中学までしかこ

の家に育っていない。その出京も、家との確執、羈絆から脱出という文脈で行なわれたわけではなかつた。とすれば、彼が△ハイカラ▽な結婚理念を抱いたのも、「家」の重圧をほとんど蒙らなかつたがためと考えられるし、現行の結婚制度のもつ不合理性を撃つ、囚われない自由な眼を持たたのも、同根の理由によると考えられるのである。（同時に、彼の弱点も、そこにあると思われる。「家」との格闘がなかつたために、彼の思想は、鍛えられることがなく、脆弱なものになつてしまつたとも考えられるのである。このことについては、後段でも触れる。）

もちろん、都市化にともなう核家族化現象など、着々と変化していた時代背景も考慮に入れなくてはなるまいが、いずれにせよ、河合譲治の立っていた場所が、従来の伝統的な「家」の觀念の崩れかかつた地平、その破れ目であつたことは記憶しておいてよいだろう。これは、一九二〇年代の一つの特質でもある。

では、二点めの、河合譲治の炯眼は、はたして本物だつたかという問題だが、それは、ナオミとの出会いから結婚、そしてそのなれの果てまでを追跡していく過程で、おのずから明らかになつてくるだろうと思われる。それは、次節で詳しく述べるつもりだが、先回りして結論じみたことを少し述べておかなければ、やはり、彼の炯眼も、本質的に透徹したものではありえなかつたと言わざるをえないようである。

彼とナオミが、先に述べたような、制度としての結婚のもつ不合理性を克服し、人格的なコミュニケーションに支えられた新しい結婚形態を創りだせたかという点では、ついには否と答えなくてはならないようなのである。これは、河合譲治の可能性と限界という視点で、次節で

詳しく述べる。とりあえず、ここでは、彼の結婚観をめぐり、彼の精神構造の一端として、共同体の持つ伝統的因襲的体質を厭う心性（反共同体的心性）があったことだけは確認しておいてよいだろう。

六、最後に、河合譲治の精神構造を知るうえで、もう一つ見落せない次のエピソードを紹介し、五の反共同体的心性とは矛盾する心性——共同体的秩序に対していやおうなく親和力を感じてしまう共同体的心性の発露についても一言しておこう。

ナオミとの結婚生活に破れ、△孤独と共に失恋に苦しめられてる▽た折に、更に追いうちをかけるように△母が脳溢血で突然逝ってしまった▽局面で見せる河合譲治の変化である。

その母にかうも急激に思ひがけなく死なれた私は、亡骸の傍に侍りながら夢に夢見る心地でした。つい昨日まではナオミの色香に身も魂も狂つてゐた私、そして今では私の前に脆いて線香を手向けてゐる私、この二つの「私」の世界は、どう考へても連絡がないやうな気がしました。昨日の私がほんたうの私か、今日の私がほんたうの私か？——嘆き、悲しみ愕きの涙に暮れつゝも、自分で自分を省ると、何処からともなくさう云ふ声が聞えます。「お前の母が今死んだのは、偶然ではないのだ。母がお前を戒めるのだ、教訓を垂れて下さつたのだ」と、又一方からそんな声が聞えて来ます。すると私は、今更のやうに在りし日の母の涕を偲び、済まない事をしたのを感じて、再び悔恨の涙が堰きあへず、あまり泣くので極まりが悪いので、そつとうしろの裏山へ登つて、少年時代の思ひ出に充ちた森や、野路や、畑の景色を眺おろしながら、そこできめざめと泣きつゞけたりするのです。／（中略）

で、その時の私の考では、自分は最早や都会の空気が厭になつた、立身出世と云ふけれども、東京に出て唯徒らに輕佻浮華な生活をするのが立身でもなし、出世でもない。自分のような田舎者には結局田舎が適してゐるのだ。自分はこのまゝ、國に引つ込んで、故郷の土に親しまう。そして母親の墓守をしながら、村の人々を相手にして、先祖代々の百姓にならう。と、そんな気持ちにさへなつたのです……（後略）

引用の前半に見られる河合譲治の深い自省、悔恨、少年時代の追想などは、もちろん、母の死にみまわれた一時的な感情の凋落とそれなこともないが、△二つの「私」の世界▽（一つは、△ナオミの色香▽に象徴される△都会▽の華美な世界、もう一つは、△母▽につながる△田舎▽の地味な懐かしい世界）を、改めて意識にのぼせ、そのどちらが△ほんたうの私▽なのかを自問する時、河合譲治は、自らの生の根つこに当たる部分を探りかけている。それが、引用後半の、△都会▽生活の虚妄を思い、△田舎者▽としての自己を確認し、共同体への還帰を考へるところにつながっていくのである。ここでは、△都会▽／△田舎▽の断層に陥り、どちらの岸に身を寄せるかで思い悩みつゝ、いったんは否定した△田舎▽・△故郷▽に自己をつなぎとめることによって、精神的安寧を見いだそうとしている河合譲治の姿を確認することができるのである。

このように、河合譲治の精神構造は、一方で、共同体の持つ因襲的体質を厭いつつ、△ハイカラ▽で△自由▽な都市生活を希求する要素と、その反面、都市生活に同化できず、△田舎育ちの無骨者▽としての自己を苦々しく認めつつ、精神的基盤としての共同体に、あらがい

がたい親和力を感じる要素とが、錯綜しつつ混在していることがわかるのである。

「痴人の愛」を都市小説として読み解く鍵の一つとして、この河合譲治の精神構造の揺れ、その振幅が大きな意味を持つてくると考えられる。また、この文脈で見えていく時、ナオミの存在の意味も少しずつ解けてくるところがあるはずである。

次節では、ナオミの意味を考えつつ、河合譲治の都市生活の可能性と限界とを眺めてみることにしよう。

二 河合譲治の可能性と限界

河合譲治がナオミと出会った時、彼の年齢は、数えて二十八歳、ナオミは、十五歳である。そこには、一回り以上の年齢のひらきがある。さしあたり、その年齢差から問題にしてみよう。なぜ、河合譲治は、一回り以上もはなれた少女を見初めたのか。それを考える前に、当時のナオミがどのような少女であったかを垣間見ておくことは、無駄ではあるまい（むろん、それは、河合譲治の眼というフィルターを通じたものでしかないが）。

ナオミ——浅草、千束町の△銘酒屋▽の娘。東京一の歓楽街に生まれ育った歴とした東京在住者。父親がなく、兄弟が多いので、母親は、娘を△芸者▽にするつもりだったが、本人が気に入らず、十五歳で△カフェエの女給▽に出される。河合譲治は、ナオミを次のように語る。

一体十五六の少女の気持と云ふものは、肉親の親か姉妹でゞもなければ、なかなか分りにくいものです。だからカフェエにゐた頃

のナオミの性質がどんなだったかと云はれると、どうも私には明瞭な答へが出来ません。（中略）が、ハタから見た感じを云へば、孰方かと云ふと、陰鬱な、無口な児のやうに思へました。顔色なども少し青みを帯びてゐて、譬へば斯う、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたやうな、深く沈んだ色合をしてゐて、健康さうではありませんでした。

ここで河合譲治は、ナオミの△性質▽を本当には把握していなかったことを正直に△告白▽したうえで、客観的には、ナオミが△陰鬱▽・△無口▽・△不健康▽といった、どちらかと言えば、地味で陰気臭い少女であったことを述べている。しかし、彼が、そのありのままのナオミを気に入ったのではなかったことに留意しなくてはならない。

惹かれた要因は、大きく二つある。一つは、△「奈緒美」▽という名前が△ハイカラ▽で、△NAOMIと書くことまるで西洋人のやう▽に感じられること、もう一つは、顔だちが△活動女優のメリー・ピクフオードに似たところ▽があり、体つきも含めて△西洋人臭ひ▽ところを持つていたという二点である。この二つの要因は、どちらも△西洋人▽との類同性を契機にしている点で通底しており、従来は、作家谷崎の当時の熱烈な西洋崇拜熱と関連づけられて把握されてきた。しかし、作家の事情をひきあいに出さず、もう少し、作品内部で連絡をつけるとうなるか。

ここで浮かびあがってくるのは、先に見たナオミの実像（陰鬱・無口・不健康）と、ここでのイメージ化された虚像（ハイカラで西洋人臭い容姿）とが、大きく乖離しているという事実である。この乖離をとらえて、河合譲治を、記号にしか反応できない記号的人間ととらえ

る見解（小森陽一）もあるが、それはそれとしてうべないつつも、さらに、ここに映し出されたナオミの虚・実の二面が、実は、河合譲治の二面性とオーバーラップしていることにも注意を払っておく必要がある。

前節で見たように、河合譲治は、共同体的心性と反共同体的心性とを混在させていた。わかり易く言えば、地縁・血縁共同体的な旧い体質を、否定しつつすがりつく、或いは、ひきずりつつそれを嫌悪するといった二面性を発揮していたが、ここでは、それが、奇妙にねじれて顕現し、△田舎育ちの無骨者▽としての彼が、人づきあいの拙さから、一回り以上も歳の離れた、物心つかぬ地味で△無口▽な少女を発見し、△ハイカラ▽で△自由▽な都市生活を希求する彼が、その△ハイカラ▽さの究極のイメージとしての△西洋人臭ひ▽名前と容姿とを、その同一の少女の中に夢みているという構造になっているのである。彼にとつてのナオミは、そのどちらか一方だけでは駄目だったのである。経済的に、或いは、人格的に対等の人間関係を要求してくる△財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい訳ではな▽くて、擬似親子関係を結べるような（実際、△「ベビーさん」と「パパさん」▽の関係を演じている）、年齢の隔った庇護下における少女であって、かつ、陰気臭くなく△ハイカラ▽なイメージを兼ね備えた△都会▽的な女性でなくてはならなかったのである。少なくとも出会いの時のナオミは、河合譲治にとつて、理想をかなえてくれる、最も近づきやすい女性であったことは間違いないのである。

とすれば、すでに、ここにおいて、対等な人格的コミュニケーションに支えられた新しい結婚形態などとはほど遠い選択が行なわれてい

たということになるわけであって、前節で見たような河合譲治の炯眼の限界が、おのずから現れていると言ふべきなのである。彼の夢みるナオミとの結婚生活とは、次のようなものであった。

……一人の少女を友達にして、朝夕彼女の発育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、云はゞ遊びのやうな気分で、一軒の家に住むと云ふことは、正式の家庭を作るのとは違つた、又格別な興味があるやうに思へました。つまり私とナオミでたわいのないまま、とをする。「世帯を持つ」と云ふやうなシチ面倒臭い意味でなしに、呑気なシンプル・ライフを送る。——これが私の望みでした。（傍点ママ）

前節で見た河合譲治の理になつた結婚観が、かすかに影をとどめながらも、どうしてここまで変質してしまったのかと思われるほど、ここでの夢みられた結婚生活は、歪みを生じさせている。それは、△シンプル・ライフ▽と言ひ条、制度としての結婚が持っていた因襲性、前近代性を超克したものにはなつてなく、それらを暫定的に回避したところで、△まま、と▽として、遊戯的な都市生活のなかに、盲目的に埋没していくことではなかつたのである。

ひるがえつて、当然のことではあるが、ナオミは、△人形▽ではない。彼の思惑を超えて、急速に成長していこうとするのである。以後、二人の結婚生活が、破局に向かつて一気に傾斜を転がっていくいちいちの過程を追跡することは、紙幅の都合上できないが、次に紹介する河合譲治の変節ぶりだけは、従来あまり問題にされなかつただけに、記憶すべきこととして引用し、言及しておこう。

場面は、二度めの鎌倉滞在。ナオミが男友達である熊谷や浜田に対

して、△娼婦△のように振舞っていたことが発覚し、二人の間に深い溝が生じた局面である。河合譲治は、絶望しつつも、なんとか二人の関係を修復しようとして、二つの提案を出す。その一つが、ナオミに△子供△を生んでもらうという考えである。△「お前、子供を生んでくれないか、母親になつてくれないか？ 一人でもいゝから子供が出来れば、きつと僕等はほんたうの意味の夫婦になれるよ、幸福になれるよ。お願いだから僕の頼みを聴いてくれない？」△という発言を記憶しておこう。

そして、もう一つは、住処をかえるということである。

ナオミがどうしても子供を生むのが厭だといふなら、私の方には又もう一つ手段がありました。それは大森の「お伽噺の家」を畳んで、もつと真面目な、常識的な家庭を持つと云ふ一事です。全体私はシンプル・ライフと云ふ美名に憧れて、こんな奇妙な、甚だ実用的でない絵かきのアトリエに住んだのですが、われ／＼の生活を自堕落にしたのは此の家のせりも確かにあるのです。かう云ふ家に若い夫婦が女中も置かずに住まつてゐれば、却つてお互に我が儘が出て、シンプル・ライフがシンプルでなくなり、ふいだらになるのは已むを得ない。それで私は、私の留守中ナオミを監視するためにも、小間使ひを一人と飯焚きを一人置くことにする。主人夫婦と女中が二人これだけが住まへるやうな、所謂「文化住宅」でない純日本式の、中流の紳士向きの家へ引き移る。今迄使つてゐた西洋家具を売り払つて、総べてを日本風の家具に取り換へ、ナオミのために特にピアノを一台買つてやる。かうすれば彼女の音楽の稽古も杉崎女史の出教授を頼めばよいことになり、英

語の方もハリソン嬢に向いて貰つて、自然彼女が外出する機会がなくなる。(傍点ママ)

これらは、大袈裟にいえば、河合譲治の転向——伝統への回帰である。彼は、△ほんたうの意味の夫婦△といい、△常識的な家庭△という。しかし、前節でも確認しておいたように、こうした△美名△のもとに隠蔽された、制度としての結婚のもつ伝統的因襲的体質をこそ、彼は嫌っていたのではなかったか。子供を生んで母親になり、女中を二人使つて全てが△純日本式△の住処に、つつがなく△幸福△に暮すここに夢みられた△常識的な家庭△とは、ひとえに、ナオミの自我を抹殺し、彼女を「家」の中に封じ込めるためだけに機能する。ナオミが激しく拒絶したのは、至極当然のことであつたのだ。

この河合譲治の百八十度の変節ぶりは、しかし、予定されていたことでもあつた。先にも見たように、彼の内部の奥深いところには、このような、共同体的秩序にいやおうなく親和力を感じてしまう共同体的心性が流れていた。だから、もはや、このことに對して、とやこう批評することはさしひかえよう。しかし、ここに、河合譲治の限界が、最も露骨な形で表われていること、そして、敷衍するならば、一九二〇年代当時の都市生活の持ついた本質的な難局をも作品が言いあてているということ、我々は認識しておかなくてはならないだろう。

△ハイカラ△といい、△娯楽△といい、△文化住宅△における△シンプル・ライフ△といい、それら都市生活が、全くの徒花にすぎず、△輕佻浮華△なる一時的狂乱に終わってしまったのは、その根幹に残存していた、地縁・血縁共同体の孕みもつ伝統的因襲的封建的体質を、

正確に自己の内部に見すえ、それを超克しようとする動因を、根本的に欠いていたからに外ならなかった。そのことを、河合譲治の挫折は、明瞭に語っているのである。

こうして見てくると、彼が、「家」との確執、羈絆からの脱出という関門を通過していなかったことは、やはり、本質的な弱点であったことを認めなくてはならないだろう。このような形で手に入れられた都市生活は、必然的に、生活の空洞化を招き、自己を見失う結果をひきおこす。ナオミにひきずられ、△田舎▽村落共同体への還帰をも果たせなかった河合譲治が、やがて、作品ラストの横浜での無国籍的な生活と人間関係とのなかで、被虐的に△痴人▽を演じることで、かろうじて自己を保ちえているという事態は、痛烈なイロニーたりえている。

この作品を都市小説として読み解くとは、こうした一九二〇年代における都市生活のイロニー性を、作品世界が的確に描きだしているという事実注目することに外ならない。

そして、この問題は、さらに別の形で、ナオミの生き方をどう評価するかという問題にまで発展するのである。次節では、一九二〇年代・都市を生きるナオミの存在のありようにスポットライトを当ててみよう。

三 無国籍的女性としてのナオミ

前節までで述べてきたような、河合譲治の可能性とより大きな限界とを過不足なく見極めたうえで、次に、ナオミという女性を、いったん、河合譲治の「語り」の足枷から解きはなしたとしたり、どのよう

な姿を浮かびあがらせるだろうか。ここで言う「語り」の足枷とは、「語り」そのものが、おのずから内包する価値判断、つまり、語り手・河合譲治の価値観、イデオロギーのことであり、それをいったん無効化したうえで、ナオミの全体像を復元してみようというのである。つまり、たとえば、英文法の誤りを指摘され、△馬鹿▽よばわりされたナオミが、△いきなり帳面を鷲掴みにして、ピリピリに引き裂いて、ぼんと床の上へ投げ出したきり、再び物凄い瞳を据ゑて▽睨みつけるという行為を、△傲慢な、我が儘な根性▽と裁断していく装置そのものを解体し、その行為の意味を、ナオミの内部生命の変容過程のなかに、正しく位置づけることを目指すのである。

当初、ナオミは、意志を持たぬ△人形▽であった。もちろん、それは、河合譲治の望む姿を演戯していたに違いないのだが、ナオミ自身も、肉体上の交渉を持った際に、△「譲治さん、きつとあたしを捨てないでね」▽と吐露したように、自分の存在が河合譲治の所有物であることを自ら認めてしまっていたのである。だから、当然、河合譲治は、△私にとつてナオミは妻であると同時に、世にも珍しき人形であり、装飾品でもあつた▽という形で、完全にナオミを支配しきっていた。だが、その△人形▽も、意志を持ちはじめ。はじめは、△反抗▽の形をとった。先に見たノートを引き裂く事件も、その一つの現れである。しかし、その△反抗▽は、まだ脆弱なものでしかなかった。河合譲治の詫まらないなら、出でいけという命令に、△さう云はれると、きかぬ気のやうでもそこは流石に子供でした。容易ならぬ私の剣幕にナオミはいさゝか怯んだ形で、今更後悔したやうに殊勝らしく項を垂れ、小さくなつてしまふ▽のである。

しかし、ここで、河合譲治は、自らの行使している経済的権力、及び、性的権力といった封建的権威については、ほとんど無自覚である。ゆえに、一方的にナオミの行為をへ傲慢な、我が儘な根性Vと断罪して恥じないのである。だが、経済的にも性的にも手足を縛られたナオミにとっては、そのへ反抗Vが、たとえ脆弱なものでしかなくとも、精一杯の抵抗なのであり、その屈辱が、彼女の眼差しの持つへ動物電気V——へ女のものとは思はれない程、炯々として強く凄じく、おまけに一種底の知れない深い魅力を湛へてゐるV眼差しとなつて、光っているのである。

ナオミは、河合譲治の行使する封建的権力を相対化するために、唯一の武器である眼差しのへ動物電気Vに賭け、次第に、男性のへ抵抗力Vを奪い取り、封建的権力構造を空無化し、力関係の逆転を図るのである。

そして更には、経済的実権を奪い取り、性的にも男性を組みくために、へ淫婦Vに変貌することを辞さない。

私はその時分、彼女をつくくへ天稟の淫婦であると感じたことがありました、それはどう云ふ点かと云ふと、彼女はもとくへ多情な性質で、多くの男に肌を見せるのを屁とも思はない女でありながら、それだけ又、平素は非常にその肌を秘密にすることを知つていて、たとひ僅かな部分でも、決して無意味に男の眼には触れさせないやうにしてゐたことです。誰にでも許す肌であるものを、不断は秘し隠さうとする、——此れは私に云はせると、確かに淫婦が本能的に自己を保護する心理なのです。なぜなら淫婦の肌と云ふものは、彼女に取つて何より大切な「売り物」であり、

「商品」であるから、場合に依つては貞女が肌を守るよりも、一層嚴重にそれを守らねばならない訳で、さうしなければ、「売り物」の値打ちはだんくへ下落してしまひます。ナオミは実に此の間の機微を心得てゐて、嘗て彼女の夫であつた私の前では、尚更その肌を押し包むやうにしました。

場面は、このすぐ後ろで、河合譲治がナオミに完全に屈伏してしまふ、ほぼ作品の結末部分である。ここでの彼の判断は、かなりのを得ていると言つてよいだろう。二人の力関係がほぼ逆転しかかり、上下関係の低位に押しやられた時、はじめて、河合譲治には、ナオミの戦略の全貌が見えてくるのである。それは、体をはつた冷徹な抵抗であつた。女性の肉体がへ「商品」Vでしかないのなら（それが、河合譲治との関係で学びとつたナオミの認識である）、そのへ「商品」Vとしての肉体を武器に、積極的に自己の世界を実現していく。そこには、きれいごとや建前論の一切が通用しない、抜きさしならない力の磁場があるだけである。更に言えば、日本の近代が常識として育ててきた「健全」な婦徳や規範も、ここでは完全に無効化させられているのである。

こうした形で手に入れられたナオミの自己実現の世界は、作品ラストの横浜での生活に完全に定着していると言つてよいだろう。

へ前に瑞西人の家族が住んでゐた家を、家具ぐるみV購入し、それぞれ独立した寝室を持ち、家事一切はアマにさせる。へ毎朝十一時過ぎまで、起きるでもなく睡るでもなく、寢床の中でうつらくと、煙草を吸つたり新聞を読んだりしてV過し（へ煙草はディミトリノの細巻、新聞は都新聞、それから雑誌のクラシックやヴオーグを読むV

む)、へ起きて、真つ先に風呂へ這入り、湯上りの体を又暫く横たへながら、マツサーチをさせ、へそれから髪を結び、爪を研ぎ、へ何十種とある薬や器具で顔ちゆうをいぢくり廻し、着物を着るのに彼れか此れかと迷つた上で、食堂へ出るのが大概一時半になり、食事後、のんびりして、晩に、パーティーや、ホテルにダンスをしに出かけるという運びである。この怠惰な生活態度を、眉をしかめながら否定しざるは、読者の自由である。事実、ナオミに嫌悪感を抱く向きも、多いはずである。しかし、さしあたり、そうした感想は、あまり意味をなさない。ここでのナオミの、一見西洋風に見える、しかしその実、どこの国の流儀ともしれない不可思議な無国籍的生活態度は、ナオミ自身が望み、それを手に入れるために、文字通り、体をはって、日本の近代もつ封建的、因襲的体質と格闘した結果、実現したものであるからだ。その意味では、ナオミの存在は、日本の近代そのものを突き抜けてしまっている。

そして、その人間関係についても、同様のことが言える。

ナオミの友達をよく変りました。浜田や熊谷はあれからふつつり出入りをしなくなつてしまつて、一と頃は例のマツカネルが気に入りのやうでしたが、間もなく彼に代つた者は、デュガンと云ふ男でした。デュガンの次には、ユスタスと云ふ友達が出来ました。このユスタスと云ふ男は、マツカネル以上に不愉快な奴で、ナオミの御機嫌を取ることが実に上手で、一度私は、腹立ち紛れに、舞踏会の時此奴を打ん殴つたことがあります。すると大変な騒ぎになつて、ナオミはユスタスの加勢をして「気遣ひ！」と云つて私を罵る。私はいよゝ／＼猛り狂つて、ユスタスを追い廻す。

みんなが私を抱き止めて「ジョージ！ ジョージ！」と大声で叫ぶ——私の名前は譲治ですが、西洋人はGeorgeの積りで「ジョージ」「ジョージ」と呼ぶのです。(傍点ママ)

もはや、多くを語る必要はないだろう。ナオミをとりまく人間関係は、そこに、あの八田舎育ちの無骨者Vだった河合譲治をも巻き込んで、文字通り、無国籍的に入り乱れている。だからその点、へ横浜Vというトボスは、巧みな設定でもあった。へNAOMI VとへGeorg Vは、日本の中の「異国」で、一切のルーツを喪失し、無縁の生を生きている。ただし、ナオミがそれを主体的に選びとつたのに反し、河合譲治が、自己を見失つた結果、それにすがりつかざるをえなかつたという事実は、両者の存在の位相の差異として明確に認識しておかなくてはならないだろう。

最後に、蛇足をつけ加えるならば、ナオミが無国籍の女性へと変貌するためには、どうしてもへ化粧Vによる変貌が必要であつた。

このことは、動かしがたい事実である。しかし、このペルソナの下には、もはや素顔といったようなものは存在しない。かつてあつた素顔(先に見た陰鬱、無口、不健康といった実像)への郷愁を一切語らず、永遠に、この不毛で徒花的な一九二〇年代・都市の最前衛を駆け抜けていった女性——それが、このナオミなのである。当時の社会風俗の中へ瀰漫したへナオミズムVと、このナオミとは、むろん何の関係もないことなのである。

四 都市小説としての「痴人の愛」

以上見てきたように、作品「痴人の愛」には、一九二〇年代・都市とぬきさしならない関係性を結ばざるをえなかった人間存在のありようが描き出されていた。一口に都市小説と言っても、ただ単に都市的な風俗が描き込まれただけの作品ならば、あまり問題にするに足りないし、まして、その風俗が、現在の眼で見ても、古びているか否かを、評者の単なる印象で問題にするのは、ほとんど意味をなさないだろう。

河合譲治なる都市流入者は、都市／田舎（地縁・血縁共同体）の深い断層に陥り、その狭間で大きな振幅を描いた。そして、最終的には、自己を見失う形で、実体から切り離された *Anglophone* という記号化された無国籍的人間に変貌した。彼は、 \wedge 痴人 \vee として生きることになるうじて、自己の存在証明を見いだしたと云ってよいだろう。

ナオミは、都市の前衛を駆け抜け、やがて、日本的近代をも突き抜け、無国籍的人間としての自己を実現した。ここには、一九二〇年代・都市を生きる一つの極限の姿を見いだすことも可能であろう。

都市が、人間の身体や思想、精神構造の奥深くまで侵入し、それぞれの態度決定を鋭く迫ってくる一九二〇年代において、記号化した生の両極を体現してみせたのが、この都市小説「痴人の愛」であったと言えようか。

(了)

〔附記〕

本稿は、シンポジウム「方法の可能性を求めて——『痴人の愛』を読む——」(『日本近代文学』昭61・10・10)に刺激を受けていることを明記

しておく。

引用は、全て中央公論社版『谷崎潤一郎全集』(第十卷、昭57・2・25)に拠った。仮名遣いは原文のまま、漢字は現行の字体に改めている。